

談天

DANTEN



大野 英男

一般社団法人東北経済連合会 参与

ニューノーマル時代の大学

新型コロナウイルス感染症で私たちを取り巻く環境が一変した。東北大学でも、アルバイト収入が途絶えた学生たちに対し、自己財源と皆さまからのご寄付を活用して経済支援を行った。特に家計が急変した学生に対しては特別給付型奨学金を用意した。また、学生自身がサポーターとなって他の学生を支援するしくみを創設し、通常のアルバイトに代わる雇用機会を提供した。第二波の襲来に備えた対策の検討も、本学の専門家を交えつつ進めている。

一方、大学の教育研究活動も、ニューノーマルに向けて大きな変化を遂げた。感染症拡大防止のため、春からの授業4000科目をすべてオンラインで提供している。オンライン化してみると、教員にとっては学生一人一人にアクセスしやすい、学生にとっては質問がしやすい、時間を自由に使えるなど、双方にとって利点が大きくなってきた。感染症やオンライン授業に関する大学内のオンラインシンポジウムには700名近くの参加者があった。また世界各国の放射光施設リーダーが参加する国際オンラインサミットを主催し、新型コロナウイルス研究を推進する共同コミュニケを発表した。「東北大学緊急学生支援パッケージ」のオンライン記者会見には、仙台はもとより全国の記者が多数参加した。学生相談や窓口業務もオンラインでできるようにした。印鑑フリーを年内に実現すると宣言したところ大きな反響があった。

治療法が確立しておらず、ワクチンもまだない新型コロナウイルス感染症の影響下で、このように東北大学はオンラインの力を最大限活用した「コネクテッドユニバーシティ」に変身しつつある。私たち構成員はその変化を日々実感している。

今年から数理データAI教育を、文理を問わず全新生に必修とした。新しい科目を教える教員の数が不足して頭を悩ませていたのだが、これもオンラインを活用することでめどがついた。講師は遠隔でも十分であるし、事前収録したコンテンツを配信してもよい。高等教育の新しいあり方であろう。

これまで大学は、社会が必要とする知識やスキルをタイムリーに提供してきたとは、必ずしも言えなかった。しかし今、「学問の府」は社会変革を先導する人材が育つ場として急速に変化しつつある。大学が提供すべき知識・スキルとしては、数理データ・AIなど現代的な道具を使いこなすことも含まれるであろう。大学は社会人も含めた、やる気のある人に開かれた学びの場となりつつあるのである。

この変化こそ、ニューノーマル時代の地方創生において、大学が担うべき役割を理解する鍵であろう。東北経済連合会が掲げた「わきたつ東北」のビジョンの下、産業界だけでなく東北地域7県の知事や大学長をはじめとする産学官金が広域で集まる機会があることは素晴らしい。経済、生活、課題を共有するこの広域の取り組みに、オンラインを活用した人材育成が加わると、東北地域は大きく飛躍するに違いない。私たちも大いに貢献していきたい。

(東北大学 総長・おおの ひでお)